

教科・領域教育専攻

社会系コース

高橋 勝也

指導教員 井上 奈穂

## 序章 問題の所在

本研究では多くの子どもたちが興味・関心を高く示すシミュレーションを活用し、これをヒントに教材開発を展開しようとするものである。さまざまな学問でも活用されているシミュレーションは、人間社会の変化を読み解くのに有効な教育方法になり得て、新しい社会科学の形成を助けるものになると考えている。知識の習得・活用はもちろんのこと、現代社会の諸課題に向かい合い、挑み続ける子供たちの育成に寄与する授業開発に取り組む。

## 第1章 学校教育におけるシミュレーション

### 教材の意義

学校現場の経験を有する筆者は、シミュレーションの有効性を実感している。公民科授業において社会のしくみを理解させるとき、制度を網羅的に詰め込みがちになり、生徒の拒否反応を感じることは少なくない。しかしながら、シミュレーションの手法を採り入れることで、生徒の関心・意欲・態度が大きく高まる。その理由として、①現代社会が複雑化するゆえ、問題を分析しようとしても難しさを感じてしまう。②黒板上であっても、コンピュータ上であっても、単純化したモデルを提示することは、生徒たちのイメージ力をアップさせる。③模擬的な活動を繰り返すことで、社会に貢献するアイデ

アや論理的思考に結びつく。このことから、生徒は前向きに意欲的に授業へ臨むようになるため、大いなる可能性が秘めていると言えるのである。

## 第2章 先行研究の分析

先行研究として取り上げた教材は3つである。これらに見られるシミュレーション世界は、教室の中で再現された仮想的なシミュレーション世界である。教材化を通して、シミュレーション世界として教室の中に現代社会や生活世界を再現しているところに特質がある。

しかし、これらのシミュレーションを活用した教材の致命線は、教科書の学習内容とどのように接続しているのかという点である。教師は生徒を楽しませようとする存在ではあるが、授業は楽しむためにあるのではなく、何を学ぶかのためにある。シミュレーションが子どもたちの興味・関心を引き付けることは想像するに難しくないが、所詮、ゲーム＝遊びとの認識が一般的である可能性がある。シミュレーション教材を活用する前後に、教科書を用いた学習内容を扱えるような、接続性のある教材にならなければ生徒にも教師にも意味がなからう。このような課題を先行研究の分析で明らかにし、本研究を進めていく。

### 第3章 授業構成論

シミュレーションを反映した教材が、どのように子供たちの社会認識形成に結びつくかを明らかにするため、「知のモデル化」という理論を展開する。「知のモデル化」とは、次のようなものである。

子供たちは誰でも、日常生活においてさまざまな経験を積んでいる。そのような中、子どもたちは地域社会でのごみ処理施設建設問題から地球規模での地球環境問題まで、あらゆる現代社会の諸課題を考察することだろう。このとき、子どもたちは複雑化した現代社会の諸課題に難しさを感じてしまうかもしれない。そのような難しさに対して、子どもたちの何の気ない日常生活での経験（例えば、人間集団には対立が起きてしまうこと、人間は協力した方がより良い生活ができることなど）を踏まえたシミュレーションを活用すれば、現代社会の諸課題をよりよく考察することができるのではないだろうか。自らの経験に基づく「知」を単純化したシミュレーション教材によって喚起して、あらゆる現代社会の諸課題を考察できるようにしようとするものが、「知のモデル化」である。

### 第4章 単元の開発

開発した授業実践は次のようになっている。

シミュレーションの世界を二つのだけの農村（A村、B村）に設定し、農業だけで生活を成す村民という役割を与える。どちらかの村民になった子供たちは農業生産に欠かすことのできない水、つまり、灌漑用水の整備をしなければならないというシナリオを提示される。しかし、その整備には多額の費用を要する。そのため、それぞれの村が公正に費用を負担すれば、農作物の収穫量を増やすことができるが、「相

手の村だけが費用を支出さえしてくれれば、ただ乗り（フリーライド）すれば良い！」と日常生活の経験だけで気づいてしまうのである。みんなが協力すれば、より良い社会になると気づきながら、自分だけが得をしようとして、周囲と対立を引き起こして、両者が合意できないという状況を体得させる教材になっている。

一方、子どもたちに身近な地域社会での課題としてどの地方自治体でも起こり得る、ごみ処理施設建設問題を分析した。概要は、徳島市を中心とする市町村が新施設建設候補地を巡って対立し、建設候補地となった佐那河内村では大きな住民反対運動が展開されているものである。全ての市町村が協力できれば、対立は解消して効率的な地方行政が展開できる可能性があるものの、自らの損害を考慮してしまうことで対立が激しさを増している状況になっている現代社会の課題である。

授業実践を経た子どもたちは、地域社会で目にするゴミ処理施設建設問題を、「効率と公正」や「対立と合意」という概念を用いながら考察できると分かった。子供たちの何の気ない日常生活での経験だけで、現代社会の諸課題を考察できるようになったのは、「知のモデル化」が貢献していると言えよう。

### 第5章 本研究の成果と課題

本研究の成果は、教材化シミュレーションと現代社会の諸課題の相互関係性を「知」をベースに構造化できたことで、子どもたちの社会認識形成をスムーズにしたことである。

一方、課題はカリキュラム編成に結び付けられるよう、あらゆる学習内容に対応するような教材化シミュレーションを生み出す汎用性の構築である。